



## 辺境の変貌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ペピン, ハンス・ヨアヒム, 小笠原, 清二, 楠本, 洋子, 阪本, 孝之, 多田, 美智子, 中空, 洋子, 廣瀬, 明, 森田, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005961">https://doi.org/10.24729/00005961</a>

# Eine Landschaft verändert sich

Herrn Prof. Funakoshi zur Emeritierung  
in aufrichtiger Dankbarkeit

ハンス J. ペピン (編)

Georg Forster, der wie Sie, lieber Herr Funakoshi, einen beträchtlichen Teil seiner wissenschaftlichen Energie dem Studium der Geschehnisse eines Lebensraumes widmete, hätte mit größter Wahrscheinlichkeit seine helle Freude an dem Werk des Biologen und Historikers Hansjörg Küster (geb. 1956) gefunden, dessen Forschungsergebnisse unser Wissen um die Genese einer Landschaft ungemein bereichern.

Im Anschluß an die großen römischen Agrarwissenschaftler hatte bereits Gibbon, den Forster gründlich las und dessen Werke er in seiner Rezension der englischen Literatur ausführlich berücksichtigte, den Einfluß klimatisch-geographischer Faktoren auf die Landwirtschaft im nördlichen Reichsgebiet der Römer herausgestellt. Wie sehr jedoch die Römer auch bei der Anlage ihrer Städte und ihres Straßensystems auf klimatisch-geographische Vorgaben angewiesen waren, konnte erst die moderne Klimaforschung der letzten zehn Jahre herausarbeiten, die Hansjörg Küster ganz wesentlich beeinflusst hat.

Aus Anlaß Ihrer Emeritierung, die symbolträchtig auch das Ende der 大阪府立大学 einläutet und mit der gleichzeitig auch für unsere deutsche Abteilung eine Ära zu Ende geht, haben wir für Sie, lieber Herr Funakoshi, versucht, einen kurzen Auszug aus Küsters Buch *Geschichte der Landschaft in Mitteleuropa. Von der Eiszeit bis zur Gegenwart* (2. Aufl. München 1999) ins Japanische zu übersetzen.

Wir alle wünschen Ihnen von Herzen für das nächste Lebensdrittel beste Gesundheit und frohe Schaffenskraft, um Ihre Forster-Studien von nun an *cum otio* in veränderter Landschaft fortsetzen zu können.

Ich persönlich möchte mich an dieser Stelle bei Ihnen für die jahrelange vertrauensvolle Zusammenarbeit und stete Unterstützung bedanken. Was wäre mein Leben ohne Sie?

## 辺境の変貌

小笠原清二、楠本洋子、阪本孝之、多田美智子、  
中空洋子、廣瀬明、森田明子（共訳）

アルプス北方のローマ帝国領では、初めからはっきりとした形で国境線が設けられた。このようなことは中央ヨーロッパではかつてなかったことである。ローマ人は、現在のドイツを横切る形でこの国境線を定めた。ライン河及びドナウ河は重要な交通路として帝国領に入れることが必須であった。従って、国境線は常にその対岸側を通過していた。軍事的には、ライン河とドナウ河に挟まれた地域の国境線が特に攻撃を受けやすかった。

[・・・]ローマ人はときには小さな流れの岸に沿って、またときには他の川や谷間を横切ったり、山岳地帯を越えて、しかし部分的には気候上の変化線に従って（気候的に好条件のネッカーラントはローマ帝国領とされたが不毛なホーエンローエは除外された。）、手間、暇、費用を惜しまずに国境防壁を敷設した。即ちリーメスである。リーメスは今日でも尚往時のまま各所ではっきりと目に見える壁として残されている。当時リーメスに沿って、ときにはその後背地になることもあるが、数キロメートルごとに防御砦が築かれ、また声の届く距離を隔ててリーメスの監視塔が建てられた。情報は塔から塔へ、砦から砦へ伝達された。

但し、ライン・ドナウ間のリーメスは諸々の防御策にもかかわらず外部からの攻撃に対して難攻不落というわけではなかった。このリーメスは結局ローマの統治時代のうちに後退せざるを得ない羽目に陥った。当初オーバーゲルマーニシュ・レーティシェ・リーメスはヴェテラウとレーゲンスブルク南方のドナウ河の間にあったが、後にはドナウ・イラー・ライン・リーメスが帝国領を北方民族から遮断し守ることになった。このリーメスはボーデン湖の東端、とウルム近郊でイラー川がドナウ河に合流する地点との間に築かれた。

国境線を守るため多数の兵隊が帝国の北方境界に配備された。これら兵隊の物資補給は一般民間人に頼らなければならなかった。兵隊及び一般民間人はリーメスのそば近く、あるいはその後背地に定住させられた。こうして中央ヨーロッパの歴史上初めて、アルプス北方の狭い地域に多数の人々、しかも直接食糧生産に携わらない人々が一緒に暮ら

すことになった。これらの人々は農産物を調達しなければならず、こうして中央ヨーロッパにおいても農産物を生産する人々と、その供給を受ける人々との間の相互依存関係が発展していったのである。

それと関連して発生してきたのが辺境の中での多くの社会構造物である。それらは互いの存在を前提条件としていた。即ち、都市的な集落、港湾・街道、徒渉地及び橋梁、莊園、植物を農産物として栽培する農場、集約的家畜飼育、良質な建築材料の産出等々。中央ヨーロッパにおけるローマ人の手が加えられた自然が当初どのような特徴を有していたか非常に分かり難いが、以下の通り列挙していけば、それが順次にではなく、同時発生的な現象として描写されるのが妥当ということが、はっきりするに違いない。

軍人および都市市民は農民とは全く異なった思考構造を有していた。彼らは農耕社会の人々とは異なった基準に基づいて居住場所を選定した。谷斜面の中間に位置する村落は都市住民及び軍隊にとっては、実用的ではなかった。緩やかな傾斜地上の場所は守るのが困難で攻撃されやすい。襲撃者に対する効果的な防御はまず不可能であった。またそういった場所では居住地に供給する物資の最重要輸送路である水路へ直接通じる通路が無かった。飲料水も居住地の中には存在しなかった。排水処理も困難であった。そして斜面の中間に位置する居住地では都市住民用の粉をひく水車のための水力利用ができなかった。

都市集落或いは城砦建設のためには、異なった立地条件が選ばれた。集落は可能な限り直接河川に接して発生した。しかし、そこは常に洪水の危険につきまといわれていたため、居住場所としては、河川の上方の[・・・]急傾斜地が選ばれた。そして急勾配の大・小路が川岸と都市の洪水の心配のない地区とを結んだ。これらの地区はこれで河川に繋がったのである。急傾斜地の上には家屋がぎっしりと軒を連ねて建てられた。その際、家屋を崩落から守るため手間・暇・費用のかかる建築様式、即ち木組み方式や石造様式が採用された。木造で泥壁を塗った家屋は不安定な急傾斜地という状況下では強度が不十分であった。

近隣ないしは遠隔地からの道路は都市へ通じていなければならなかった。その道路を通して水、食料、建築材料、燃料が外部から都市及び城砦へ供給されたのである。天然の供給路は大河川であり、中央ヨーロッパでは、特にライン河とドナウ河であった。これらの流れにのって物資がヨーロッパの中央から辺境へと運ばれた。但し、流れが緩やかなところでは、物資は更に遠隔地まで、即ちライン河下流やライン河上流を、またボーデン湖上やドナウ河を、あらゆる所へ流れに遡っても運ばれていった。補給用物資は地中海地域から、[・・・]ローヌ河を通して、ライン河及びドナウ河上流へもたらされ

た。日常必需品及び奢侈品はあるところでは水路を、あるところでは陸路を、バーゼルのライン河屈曲地点へと運ばれ、更にローマ軍が重要基地を置いていたアウグストへと届けられた。そこから輸送路は水上を更に下流へと向かい、マインツ、ケルン、クサンテン、ライン河河口域、果ては英国にまでも到達した。

物資の荷揚げ場所として船着場ないしは港が必要であった。港では積み込み及び荷揚げの障害となるような急流は禁物であり、あるいは船を引き上げることができる平坦な川岸が必要であった。河川沿いの都市型集落で繁栄を謳歌出来たのは、近くに港ないしは船着場を築造することが出来た場合だけであった。[・・・] 河川が幾つかの中州で分流している場所が特に都市及び港の築造条件に適っていた。そこが河川を横断するのに最も適した場所であった。即ち、幾つかの幅の狭い徒渉地で河川を横断する方が、一つの幅広い徒渉地を渡るよりも容易だからである。また、同様に二つないし三つの短い橋を中州を経由してかける方が、長い一つの橋を岸から岸へ渡すよりも容易だからである。幾つかの水路に分かれた流れは互いに干渉しあっていた。従って、一つの水路を塞ぎ止めて水量の大半を他の水路に導くことができた。こうして港のある水路の流れを緩やかにした。[・・・] あるいは港及び都市ないしは城砦は、二つまたはそれ以上の河川の合流点に築造された。合流点では流れが互いに塞ぎ止め合う形となり、水流は合流点の上流側の方が下流側よりも、穏やかとなるのである。その好例をライン河とモーゼル川が、あるいはドナウ河とイン川が、それぞれ出合い合流しているコブレンツ及びパッサウで見ることが出来る。[・・・]

ローマ帝国の属州都市の全てが必ずしも河川沿いにあったわけではなかった。物資は又ローマ帝国内を陸上輸送されることも必要であった。一方では地理的条件を最大限に活用し、他方では軍事及び民間の中枢部を連結する道を包含する街道網が必要であった。ローマ帝国の街道は可能な限り直線的に造成された。例えばミュンヘンのショッター平野を横切って走るものである。因みにショッター平野は氷河期に氷河の前縁に形成されたものである。街道は氷河期に形成された幅広い谷間の縁に沿って走っていた。[・・・] そこは決して洪水の懸念のない場所であった。こうした地理的条件によってドナウ河及びレッヒ川沿いのローマ街道の形ができあがった。[・・・] 街道は都市の所在地点で河川を横断していた。そこには徒渉地あるいは橋があった。即ち、ザルツァッハ河畔のザルツブルク、ヴェルトアッハ川がレッヒ川に合流する地点のアウグスブルク、ライン河畔のシュトラースブルク及びアウグスト、モーゼル河畔のトリーアである。街道が山岳地帯を越えるときはその勾配を最小にする必要があった。そのため街道は可能な限り平坦な鞍部を通った。例えばシュヴァルツヴァルトのキンツィヒタールの東部のように街

道はそこを通過してシュトラースブルクから遙か東方へと通ずることが出来た。[・・・]  
ローマ街道は中央ヨーロッパの高山地帯即ちアルプスを越えても通じていた。川がアルプス山脈の縁を北から南へ山脈を貫いて流れていることが、高山交通路敷設の前提条件であった。つまりローマ街道はアルペンライン即ちエッチ川及びアイザック川の谷間を利用したのである。こうしてブレンナー及びフェルンの峠道が出来たのである。

街道網の造成に当りローマ人がすでに数千年も昔から存在したであろう道路跡をしばしば利用したことは確かと思われる。ローマ人は偶々互いに繋がり合っていた個々の道路から交通網を作り上げたが、その交通網は多くの場合、当初の形を保ったまま、数世紀に亘って使用された。この交通網に関する基本概念は特に中央ヨーロッパで鉄道敷設の際に、再び採用されるどころとなった。レールを繋ぎあわせていく交通路では線路が可能な限り直線であることが必要であり、また急勾配も苦手である。多くのローマ街道と鉄道路線の延長状況が互いによく似ているのはこのような理由によるが、ローマ街道網が19世紀及び20世紀の鉄道網と酷似しているように見えるのも、また同様の根拠によるものである。

ハンスイェルク キュスター 1999年

中央ヨーロッパに於ける辺境の歴史

氷河期から現在まで (ミュンヘン) 159-162頁